

## 二〇一〇年度 日本近代文学会関西支部秋季大会発表要旨

### プロキノ映画『山宣渡政労農葬』における映像編集に関する考察

——京都花やしき所蔵フィルムをてがかりに——

雨宮 幸明（立命館大学大学院）

昭和四（一九二九）年三月五日、治安維持法に反対していた京都出身の労農党代議士山本宣治は、七生義団黒田保久二によって殺害された。プロレタリア文学運動を母体として誕生し、日本労働映画運動の先駆となったプロキノ（日本プロレタリア映画同盟）は、佐々元十による論考『玩具・武器—撮影機』（『戦旗』昭和三（一九二八）年六月）において主張されたように、プロレタリアートの新たな表現手段である小型映画撮影機を用いて、その初期映画作品『山宣渡政労農葬』（一九二九年制作）を完成した。この映画は故郷・宇治へと遺骨となって帰還した、民衆の支持を得ていた山本宣治の葬儀を記録したものであり、プロキノ初期の主要な上映作品となったものである。

プロキノの活動とその映像作品は、現在では日本ドキュメンタリー映画の源流のひとつとして評価されている。しかし、プロキノ映画作品は戦前の思想弾圧によって没収・廃棄の対象とされ、『山宣渡政労農葬』を含め現在では六本の映画作品が現存するのみである。

今回、研究対象とするプロキノ映画『山宣渡政労農葬』には大別して二つのフィルム系列が存在する。それは映画制作が完了した時点で引き渡され戦後まで保管された山本宣治生家花やしき所蔵フィルムと、もうひとつは大衆獲得のための主要な上映作品として活用された東京プロキノ支部に託されたフィルムである。現在、この両者には映像表現におけるいくつかの場面相違が認められる。この両者を比較検討することにより、これら二つの系列におけるプロキノ映画『山宣渡政労農葬』の場面相違と映像編集の検証が可能となる。

本発表はプロキノの代表作『山宣渡政労農葬』における場面相違と映像編集の問題を、主に花やしき所蔵現存フィルムの調査から検証し、二つの系列におけるプロキノフィルムの映像表現がどのように形成されてきたのか、その経緯を解明するものである。

### 岡本かの子『東海道五十三次』——〈 見ること 〉の物語——

久保 明恵（大阪府立大学大学院）

岡本かの子『東海道五十三次』（『新日本』昭和一三年八月）は、「私」と夫の三度にわたる東海道の旅を描いた短編小説である。父の斡旋により結婚し、「初恋のない」まま結婚生活を営んできた「私」と夫の歴史が、「二十年余り経」った現在から東海道の旅の回想を通じて語られている。

テキストの末尾には、鉄道関係の会社の技師である小松の、東海道を「日本の一大観光道筋」にしたいという希望を語るエピソードが描かれている。このことが回想を経た現在の地点において語られていることから、「私」たち夫婦の旅の意味は、「観光」と対置することで見出すことができると考えられるのである。テキストの語りの現在が初出の発表とほぼ同時代であることをふまえると、「観光」という言葉は、昭和六年に制定された国立公園法による国立公園の制定（昭和九年～）などの状況を想起させる。こうした法令は、見るべきものとそうでないものとに風景を峻別するものであり、風景を見るという体験に質的な変化を促したと考えられるのではないかと。

一方、回想される「私」の旅に特徴的なのは、風俗史専攻の夫による説明（重衡と千手の前の物語、芭蕉の句など）や父との「吐月峰」をめぐる思い出、歌舞伎の芝居（『蕨紅葉宇都谷峠』など）を介して、旅の風景が体験されているということである。つまり「私」の旅として語られているのは、さまざまな言説化された記憶といま風景を見ているという視覚体験とが拮抗し、固有の体験として獲得されていく過程なのである。本発表では、こうした体験を描いたテキストが、先に述べたような時代状況の中で読まれたときどのような批評性を持ち得たのかを考察したい。

## 中島敦『夾竹桃の家の女』論——ピエル・ロティ『ロティの結婚』との交錯——

杉岡 歩美（同志社大学大学院）

中島敦は昭和十六年、南洋庁内務部地方課国語編修書記として〈南洋〉に滞在し、帰国後、『南島譚』（昭和十七年十一月十五日、今日の問題社）を出版した。同書に収録された〈南洋もの〉『夾竹桃の家の女』には、書名を明示することではなく、ピエル・ロティ『ロティの結婚』が下敷きにされている。この事実は従来看過されてきたが、「蔵書目録」に「お菊さん」「RAMUNTCHO」が見出せるように、中島は早くからロティに関心を抱いていた。「南洋の日記」昭和十六年十二月二十一日条にも「Aziyade」を読む。」とその読書体験が記されている。中島は〈南洋行〉中もロティ作品を手に行っている。また、『南島譚』中、総題「環礁—ミクロネシア巡島記抄—」の下、『夾竹桃の家の女』と並んで収録された作品『真昼』には「ロティ」、『マリヤン』には「岩波文庫の『ロティの結婚』」への言及がある。特に両作において、「ロティ」の〈南洋〉への〈まなざし〉がマイナスイメージを伴って描かれていることは重要であろう。現在までに、中島作品とロティ作品との比較を正面から論じた研究は管見に入らない。中島が、『真昼』『マリヤン』で「ロティ」の〈まなざし〉を否定しつつ、『夾竹桃の家の女』では『ロティの結婚』を想起させるような構造を用いるのはなぜか。また、『夾竹桃の家の女』における『ロティの結婚』の位置付けを重視することで、新しい読みの可能性を具体的に追求したい。

## 〈殺人〉か〈侵略〉か——安部公房「変形の記録」論——

坂 堅太（京都大学大学院）

一九五一年の日本共産党入党以来主流派の党員として活動していた安部公房は、五三年頃から戦犯問題に強い関心を抱き始め、同年一月にはBC級戦犯を描いたシナリオ「壁あつき部屋」を発表している。そこでは彼等の行為は〈殺人〉という道徳上の罪として処理されるのみで、〈侵略〉という歴史上の罪は全てA級戦犯＝〈支配階級〉に帰着するものとして描かれており、BC級戦犯は〈真の戦犯〉ではないという認識が示されている。これは「民族」よりも「階級」を優先することで戦犯問題を階級問題として捉え、一般国民は戦争の被害者であるとした当時の共産党の方針に沿ったものであり、安部の党員作家としての側面を示す一例であったと言える。しかし一方で安部は、旧満州での植民地経験を語る際に支配民族としての日本人全体の侵略責任・加害性を強調するなど、「壁あつき部屋」で提示した論理に真っ向から反する見解も持ち合わせていた。

「変形の記録」（五四年四月）において、安部はこうした揺らぎに対する一つの回答を出している。安部は作中に被侵略者からの視線を導入することで日本人があくまで戦争の加害者＝〈侵略者〉であることを示し、「階級」を重視するあまり国民を被害者とししか見ない党の方針を批判したのである。「階級」の一般性ではなく「民族」固有の文脈を重視すべきとするこの考えが、五六年に展開される党批判でも反復されたことを考慮すれば、安部と党との関係は五四年で一つの区切りを迎えていたと見ることも可能である。「変形の記録」の解釈を通じ、一九五〇年代の安部を考察する上での新たな視座を提示することが本発表の目的である。

## 高祖保の未刊詩集「独楽」定稿（新資料）をめぐって

外村 彰（呉工業高等専門学校）

高祖保（一九一〇～一九四五）の未刊詩集「独楽」の定稿が、今夏、はじめて遺族より彦根市立図書館に寄贈された。

高祖は岡山県牛窓の生まれで『椎の木』同人として出発し、知的なモダニズム詩集『希臘十字』（昭八）で注目され、静謐かつ典雅な詩風の『雪』（昭十七）により文芸汎論詩集賞を受賞したが、敗戦の年に旧ビルマで戦病死している。彼が八歳から母の郷里・彦根で育った所縁もあり、発表者（滋賀在住）は、これまで高祖の評伝や書簡集をまとめ、刊行してきた。戦時下に詩境を深めた高祖の詩業は、特殊な時代背景などにより、これまで正当に評価されてきたとはいえない面がある。今回の発表においては、高祖が昭和十九年七月の応召により未刊とした詩集「独楽」の定稿をめぐり、その編纂の実状、またその意義をあらためて評価しなおそうという主旨がこめられている。

「独楽」は、詩友たちの尽力により昭和二十二年に刊行された岩谷書店版『高祖保詩集』に収録され、それがいわば「底本」となって現代詩文庫版『高祖保詩集』にも「全文」収録されている。しかし定稿では、田中冬二の序詩が付され、詩友によるとみられる内容の改変がなされていた。具体例は発表時に公表するが、定稿における「作者の意図」が表現として全うされずにいたことが、今回の調査で判明したのである。そうした事実を明らかにした上で、「独楽」の「意図、通りの姿を闡明しながら、あらためてその歴史的意義を問いたいものと、発表者は考えている。